

旧松尾村の小字

【北ノ原】

キタノハラ。

この小字は、飯田松川が開いた広い谷を見下ろす、段丘の北端にある。同時に松尾地区の北の端ともなっている。飯田長姫高校から常盤台の団地までの広い地域となっている。八幡原にあるキタノハラ小字である。

キタノハラとは何を意味しているのか。敢えて二説を挙げる。

①キタはキタ（北）で方角を表す。ノは格助詞。ハラはハラ（開）で開墾地をいう（語源辞典）。このハラには「神聖な地」の意も含まれる可能性がある（語源辞典）。以上から、キタノハラとは、「北の方にある開墾地」を意味するか。キタノハラ小字の近くに「中ノ原」小字や「南ノ原」小字があり、ほぼ南北に並んでいる。

②キタ←キダハシ（階）と転じたと考える。キタノハラとは、「段丘状になっている開墾地」となるが、どうであろうか。

全国地図には、5ヶ所にキタノハラ地名が載っている。

【山コセ】

ヤマコセ。

ヤマコセ小字は八幡原のキタノハラ小字に埋もれるようにして囲まれている小さな小字で、2ヶ所にある。かつては、この二つはつながっていたと思われる。

コセは「山陰」のこと（国語大辞典）で、ヤマコセは「山の陰になるところ」の意か。ヤマはこの場合、南側の高くなっている段丘を指すのであろう。

全国地図には、ヤマコセ地名は記載が無い。

【御射山・ミサ山】

いずれもミサヤマ。

「御射山」小字は、島田井右岸にあって、常盤台段丘の北端に当たり、キタノハラ小字の一部を挟んで2カ所に分かれている。ここには上溝の御射山社がある。

「ミサ山」小字は、代田から毛賀にかけての毛賀沢川左岸にある広大な小字である。

ミサヤマはミシャグチ信仰が地名として残ったものだという（Wikipedia）が、諏訪神社に関連する御射山祭の場である。神贄を狩り供えて崇神を封じる儀式であり（国語大辞典）、神社境内とは離れた山地に設けられることが多い。

北方の常盤台のミサヤマは、現状からみれば、村境を越えた鼎の矢高諏訪神社のミサヤマとも考えられるが、松尾村誌によれば、島田村にあった諏訪社のことで早くになくなってしまっただけで跡もわからないらしい。長徳年間の勧請という。長徳年間といういは、平安時代前期で995～998年に当たる。

南の毛賀沢近くにあるミサヤマは毛賀の諏訪神社の神事が行われたところであろう。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、3ヶ所に記載がある。末社25,000社といわれる諏訪神社の数に対しては少なすぎるか。

【茶柄山】

チャガラヤマ。

この小字は、常盤台の段丘の北東端にあり、ミサヤマ・キタノハラ・ウエノジョウ・マチヤシキなどの小字に囲まれている。

チャガラヤマとは何か。難しい地名である。チャガラといえばお茶殻を思い出すが、ここの地名としてはつな

りが見えない。語源辞典によって、二説を挙げたい。チャとガラを組み合わせて4通りの解釈が成立することになる。

①チャはチャブス(潰)という方言に関係し、「崩壊地形、浸食地形」をいう。ガラは「小石まじりの地」を意味する。以上から、チャガラヤマとは、「崩れた崖のある小石混じりの台地」か。

②チャ←チバ←ツバ(端)と転じた語で、「台地などの端」をいう。ガラ=カラ(涸。乾)で、「水の乏しい」意。すなわち、チャガラヤマとは、「乾燥しやすい台地の末端部」をいう。

全国地図には、チャガラヤマ地名はなぜか載っていない。

【北ノ原東の牧】

キタノハラヒガシノマキ。

この小字は、常盤台段丘の東端とその先の傾斜地にあり、ミサヤマ小字を挟んで、北側の小さな小字と南側の大きな小字に分かれている。なお、北側の小さな小字は、御射山獅子塚前方後円墳の前方部に当たる。

キタノハラヒガシノマキとは、「キタノハラ小字の東方にある馬などを放し飼いにしていた所」をいうのであろう。

全国地図には、こんな長い中・大字は無いが、ヒガシノマキ地名は1カ所だけであるが、記載されている。

【猿ノ子場】

サルノコバ。

この小字については、飯田市立病院に大きな小字が一つと、小さな小字が緑ヶ丘中学の北東側にある。小さい中学の近くにあるサルコバ小字はケガ小字に所属する可能性もあるので、これ以上は触れない。

サルノコバとは何を意味するのか。

サルはサラ、サル、サレと同じく、動詞サル(去。曝)に関係して、「崖地」を意味する。コバはコバ(木場)でももとは、「貯木所」の意味であったが、ここでは「山の上の平地」のこと(以上は語源辞典)。まとめると、サルノコバとは、「崖地もある段丘の平地」を意味するか。

全国地図には、サルノコバ地名は載っていない。

【御殿】

ゴテン。

この小字は鼎との村境で、八幡山の斜面を登り切った段丘上にある。

ゴテンとは、「台地」を意味する(地名の語源)。御殿あるいは御天から由来しているというから、「御殿」には本来そうした意味があったのであろう。有力者の邸宅か社殿が、この小字にあったとすれば、それから生まれた小字ということになるが、現在のところ、確認はされていない。

全国地図には、中・大字として、ゴテン地名が7ヶ所に挙げられている。

【中ノ原】

ナカノハラ。

この小字は飯田女子短期大学の西側の段丘上にある。北側に接するゴテン小字に囲まれて、小さなナカノハラ小字がある。この小さなナカハラ小字にはこの地域の中枢部があったことも考えられる。中枢部であったがために、この小区画のナカハラ小字が残ったのかもしれない。

ナカノハラとは、常識的に、北の方にある「北ノ原」小字と南の方にある「南ノ原」小字の中程にあるために名付けられたと思われる。

全国地図にも、ナカハラ地名は多く、

30ヶ所に中・大字として記載がされている。

【片羽】

カタハ。

この小字は、三菱電機飯田工場のある段丘の西端にあり、その西側の緩傾斜地の麓部分に当たる。

カタハとは何か。語源辞典によって解釈を二つ。

①カタ（片）はカタ（肩）で、この地形を人体の肩に見立てたもので、「丘の頂上からやや下の傾斜度の変わる部分」を示す。ハ（羽）はハ（端）で「縁辺」をいう。上の段丘からみても下の台地からみても、縁辺に当たる場所である。以上から、カタハとは、「段丘の縁辺部にあり、肩の高さに対応するような段丘の間にある土地」を意味するか。

②カタは動詞カタク（傾）、カタグ（傾）の語幹で、「傾斜地」を意味する。ハは「場所」を表す。ハ（端）かバ（場）の清音化か。つなげると、カタハは、「傾斜地」となる。単純に過ぎるだろうか。

全国地図には、カタハ地名は、中・大字として2ヶ所に記載があり、いずれも「片羽」の字を宛てている。

【南ノ原】

ミナミノハラ。

この小字は、三菱電機飯田工場の段丘上にある。

「北ノ原」「中ノ原」小字に対応しており、ミナミノハラとは、「南の方にある平坦地」を意味する。

全国地図には、ミナミノハラ地名は3ヶ所にあり、ナカノハラ地名に比べると、10分の1と少ない。

【北ノ沢】

キタノサワ。

この小字は、北の沢川中流の支流が合流する付近にある。

イタノサワとは何を意味するのか。これも二説を挙げたい。

①キタノサワとは、「北の方にある沢」を意味するものと思われるが、この“北”は、毛賀沢に対する方角をいうものと考えたい。

②キタをキダハシとする解釈も成立するかもしれない。キタノサワとは、「階段状になった沢」となるが、当たり前すぎる地名になってしまうか。

全国地図には、21ヶ所にキタノサワ地名が載っている。

【古城】

フルジョウ。

この小字は、松尾鈴岡公園にある。

天正18年（1590）に城主小笠原信嶺が去り廃城になるまで、長い間、小笠原家の居城であった。

フルジョウとは、「松尾城のあったところ」をいう。

全国地図にも、フルジョウ地名は、12カ所に、中・大字として挙げられている。

【金山林】

キンザンバヤシ。

この小字は、緑ヶ丘中学の北側を流れる金色洞川の最上流部の谷にある。

金色洞川のコンジキには、「黄金の色」の意味しか考えられないので、「黄金色に輝く雲母の多い谷を流れる川」であろう。

金色洞川が流れるキンザンバヤシも、また、「黄金色の黒雲母が多い傾斜地」であろうか。ハヤシには、ハヤ（逸。急）・シ（接尾語）で、「急傾斜地」を意味する（語源辞典）。

全国地図には、キンザンバヤシ地名は載っていない。

【八幡山】

ヤワタヤマ。

この小字は、鳩ヶ嶺八幡宮の西側にある傾斜地に沿った幅のある長い小字になっている。

八幡宮の祭神は、誉田別尊・息長足姫命・武内宿禰の三神。

ヤワタヤマとは、「八幡宮の境内に近い傾斜地」か。

全国地図にヤワタヤマ地名は2ヶ所に記載があり、いずれも「八幡山」の字を宛てている。

【城】

ジョウ。

この小字は、国道256号線の南北の2ヶ所にある。広い小字で、北側は松尾小学校の敷地と一部が重なる。

フルジョウがあるので、ジョウとは新たに築かれた城と誤って思ってしまうが、村誌その他を探したが、ジョウが「城」であるという記載を見つけることはできなかった。

それでは、ジョウとは何を意味するのだろうか。

ジョウ(城)はジョウ(条)で、「古代、耕地の一区画」(広辞苑)をいうのではないだろうか。ジョウ小字では、縦横の畑や水田の区画がきちんとされているように見える。明治の末に行われた耕地整理による部分もあるだろうが、条里制の遺構もあるのではないだろうか。

条里制とは、「日本において、古代から中世後期にかけて行われた土地区画制度である。ある範囲の土地を約190m間隔で直角に交わる平行線により正方形に区分する」(Wikipedia)という説明はわかりやすい。こうした条理地割は16世紀以降も遺存し続け、日本の伝統的な農村景観の基本とな

り、多くの場合、近年の都市化・圃場整備まで続いたという(岩波日本史辞典)。

作ったばかりの旧松尾村小字図(2,500分の1)で調べてみると、耕地の一辺が4.4cmのところや2.2cmのところがある。110mと55mになり、条里制の1町と0.5町に相当する。条里制の痕跡が残っているといえるのではないだろうか。

ジョウとは、「条里地割が残っているところ」を意味すると思われる。

気になることが一つある。寛文14年(1637)の検地帳には、シロ小字はあるが、ジョウ小字は載っていない。ジョウ→シロ→ジョウと転じたのか。それともシロとよばれるような、有力者の屋敷があったのか、判断しかねている。

全国地図には、ジョウ地名が、中・大字として、46ヶ所に挙げられている。宛てられている字は「城」が41ヶ所、「條」1ヶ所となっている。

【粹手】

ワクデ。

この小字は、松尾小学校の東側にあり、ジョウ、ミサシロ、クマノカワ等の小字に囲まれている。

ワクデとは何か。わかりにくい地名である。

ワク(粹)は動詞ワク(湧)の連体形で、デ(手)はデ(出)で「出ること」を意味する名詞と考えたい。合わせると、ワクデとは、「清水が湧き出ている所」となる。湧水の多いところなので、解釈に無理はないと思われるがどうだろうか。

全国地図には、ワクデ地名の記載はない。

【古瀬】

コセ。

この小字は緑ヶ丘中学の北側にある。現在は、住宅地が主で、水田や畑がある。

コセといえば、長野県では、「一方が山側になっている道」をいうことが多いが、ここでは該当しそうにもない。では、コセは何を意味しているのだろうか。二通りの解釈を示したい。

①コセとはコセミチの略かもしれない。コセミチとは、「小さな道。間道」をいう（国語大辞典）。個性のない地名であるが、挙げておきたい。

②コセ（小瀬）か。金色洞沢川が南端近くを、祝井沢川が北端を流れている。これらの川に挟まれていることを表しているのかもしれない。コセとは、「小川」のことか。

全国地図には、中・大字として、コセ地名が17ヶ所にある。宛てられている字は、「小瀬」が9カ所、「古瀬」が4ヶ所となっている。

【石ガイ】

イシガイ。

この小字は、ジョウ・コセ・ナカミゾなどの小字の間にあり、中を祝井沢川が流れている。

イシガイも難しい地名であるが、何を意味しているのだろうか。二説を挙げたい。

①ガイ←カイ（階）と濁音化した語で、「きざはし」をいう。イシガイとは、「石の多い階段状の地形になっているところ」か。傾斜の緩い土地であるが、祝井沢川が岩に当たって屈曲している所でもあり、高低差もあったと思われる。

②ガイ←カワイ（川合）と転じたもので、「川の合流点」をいう（語源辞典）。

イシガイとは、「岩があり、祝井沢川とその支流が合流しているところ」か。岩については未確認。

全国地図には、中・大字として3ヶ所に記載がある。宛てられている字は「石貝」「石谷」。

【押出シ】

オシダシ。

この小字は、国道256号線沿いにあり、祝井沢川も並行して流れている。

オシダシまたは撥音便化したオシダシが、伊那谷南部の各地にある。

オシダシとは、「土石流が堆積した所」をいう。この地方の方言であろう。傾斜地の角度が急に緩やかになる地点に多い。この島田のオシダシもJR東海の飯田線を越えたあたりから始まっており、この付近から土石流が堆積しはじめていると思われる。土石流は流木等で川が堰き止められることによって発生するので、川の長さや幅には大きく左右されることと思われる。

全国地図には、オシダシ地名は7ヶ所に記載されている。この地名、伊那谷の数に比して少ないような気はする。

【キヌタ】

キヌタ。

この小字は、緑ヶ丘中学の東側の下段にある。

キヌタといえば、「衣または絹布の製造の行われた所」が第一に浮かぶが、キヌタ地名が発生したころ、この地でそうした生産がなされていたとは思われないので、これではないだろう。寛文14年（1637）の検地帳にも載っているので、キヌタ小字の発生は、それ以前となる。

では、キヌタとは何を意味するのか。

語源辞典によって、仮説を二つ挙げたい。

①キヌタ←キハ（際）・ヌタ（湿地）と転じた語で、キヌタとは「川沿いの湿地」を意味する。この小字の東西に祝井沢川と金色洞沢川が流れている。それにきれいな清水が湧き出ていることでも知られている土地である。

②キ←シキ（敷）と転じた語で、「敷くもの」から「台地。段丘面」を意味するという。そうすると、キヌタは「湿地となっている段丘面」となるが、どうであろうか。

全国地図には、キヌタ地名は1件だけ、中・大字として採られている。

【清水】

シミズ。

この小字は、キヌタ小字の南隣にあり、祝井沢川も金色洞沢川も流れている。

シミズとは、文字通りで、「きれいな湧水のある場所」であろう。いまでも清水が出ているところだという。

全国地図には236ヶ所もの記載がある。シミズ地名は東山道との関わりが指摘されているが、この場合はどうであろうか。

【水口】

ミナクチ。

この小字は、キヌタ小字の東隣にある小さな小字である。

ミナクチとは「田へ水を引く口」（広辞苑）である。祝井沢川から水田の水を引いていたのであろう。その水の取り入れ口のあった所をいう。

ミナクチ地名は、全国地図には17ヶ所ある。中・大字だから少ないのかもしれない。

【清水田】

シミズダ。

この小字は、シミズ小字の南隣にある。金色洞沢川も西端を流れており、天竜川も近い。

シミズダとは、「湧水を利用した水田のあった所」であろうか。現在は、金色洞沢川をはじめ、井水が縦横に走っているが、かつて小字名発生字には湧水に頼ることが多かったのかもしれない。

全国地図にも、中・大字として、3ヶ所の記載がある。

【下島】

シモジマ。

この小字は弁天橋の下流で、シミズダ小字の南隣にあり、西端を金色洞沢川が流れ、東側は天竜川の堤防になっている。

シモジマとは、「（島田の中心部からみて）天竜川の下流の方にある島」であろう。堤防ができる前、小字発生時には、天竜川の島になっていたところだったと思われる。全国地図には、シモジマ地名が、17ヶ所、中・大字として記載されている。

【タヤ】

この小字は、水神橋を西から渡る手前の国道256号線沿いにある。周囲には、キヌタ・シミズ・オキジマ・クボタの小字がある。

タヤ（田屋）といえ、田の番をするために建てた小屋のことをいうが、松尾のこの付近では居住地がそれほど離れているとは思えないので、仮小屋を建てる必要はない。だから、タヤ＝田屋説は採らない。

タヤはタヤ（他屋）であろう。「婦人が月経の時に籠もる家」（広辞苑）である。血などの穢れの拡散を避けるために籠もる建物で、忌籠もりに使用するために住居とは別の棟にした建

物で、ここで別火の生活を送る（以上は民俗大辞典）。この付近の住人たちが共同で使用した忌小屋があったところと思われる。

全国地図には、タヤ地名は74ヶ所の中・大字として記載されている。

【久保田】

クボタ。

西側から水神橋を渡る直前の小字である。現在はほとんどが居住地で、水田は見えない。

クボタとは、クボ(窪)・タ(「場所」を示す接尾語)で、「おおむね周辺よりは低くなっている所」をいう。

【中溝】

ナカミゾ。

この小字は、国道256号線がほぼ90°に曲がる地点にある。松尾支所とセレモニイホールの間になる。

ミゾは、「地を細長く掘って水を通ずる所」(広辞苑)で、ナカミゾとは、「中段の台地で、縦横に張り巡らされた水路のある所」であろうと思われる。いずれも水田用の水路で、西の方の高い台地にあるアゲミゾ(上溝)小字に対する命名ではないだろうか。

全国地図には5ヶ所に、ナカミゾ地名が、中・大字として記載がある。宛てられている字はすべて「中溝」。

【石原】

イシハラ。

この小字は、NHK 飯田ラジオ中継放送所のある台地の東端にある。ソリダ・クマノカワ・カケシタ・テラドコロの小字が周辺にある。ミョウガワラ小字のある面より一段高い段丘になる。

イシハラとは、字面のとおり、「石の多い平坦地」であろう。

【明】

ミョウ。

この小字は、セレモニイホールのある段丘上に広がる。広い小字である。

寛永14年(1637)の検地帳には、「名分」として79の小字が挙げられている。この「名分」の“名”はミョウ(明)のことと思われる。“名”は寛文4年(1664)には消えているが、明治になってから「明」として復活している(以上は村誌)。

名(ミョウ)というのはよくわからないが、平安時代以降、中世を通じて、荘園・国衙領の構成単位であり(広辞苑)、中世の年貢・公事の徴税単位となった土地の区画(民俗大辞典)だという。この制度は1598年の太閤検地によって終わったが、小字名や集落名などに残存する地域も多いといわれている。松尾での「名」→「名分」→「明」の変化も、このことを反映しているのではないだろうか。

1664年の「名分」に含まれる79の小字のうち、明治になっても11の小字はそのままでの名称で残っているが、あとの68の小字は一部が明治の「明」小字になり、残りは呼び名が変わるか、他の小字に吸収されていったものと思われる。

全国地図には、中・大字として記載されているミョウ地名は、8ヶ所と、意外に少ない。

【楚山】

ソヤマ。

この小字には、旭松食品飯田工場があり、建物があつたり畑地になっていて、西側の水田地帯と対照的である。

ソ(楚)はソ(背)で、その地形を動物の背に見立てたものであろう。ソヤマ小字の所だけ少し高くなっている。ソヤマとは、「動物の背のように

少し高くなっているところ」をいう。

全国地図には、ソヤマ地名は9ヶ所に記載されている。

【熊ノ皮】

クマノカワ。

この小字は、飯田市総合運動場やコンピュータ専門学校のある段丘の一つ上の台地にある。

クマノカワとは何を意味するのか。クマ(熊)はクマ(曲)で、「(川などの)湾曲点。曲がり目」(語源辞典)をいう。ノは助詞。カワ(皮)はカワ(川)。以上から、クマノカワとは、「屈曲の多い井水のあるところ」をいうか。湧水の絶えないところで、堤も多い。水路は水田の畦に沿うようになっているので、屈曲するようになる。

クマノカワ小字は駄科にもあるが、全国地図には、4ヶ所が中・大字として載っている。

【沖島】

オキジマ。

天竜川の堤防のすぐ内側に、この小字はある。工業専用地域となっている。

オキジマとは何か。

オキ(沖)は、「山寄りに対して、川に面する低い方」(語源辞典)をいう。「天竜川にあった島の一つ」であろう。まだ堤防が無かった小字発生時には、こちらの岸近くにあった島にオキジマと名付けたものと思われる。オキジマとは、「天竜川の湿地帯にあったオキジマ付近の一带」か。

全国地図には、1ヶ所にだけオキジマ地名がある。

【代田】

シロダ。

この小字は金色洞沢川左岸の北側であって、八幡山の麓からJR東海の飯田線まで国道151号線の東西に

広がっている。

シロダとは何か。広辞苑にはシロタ(代田)とは、「田植え前の田。田植えの準備のととのった田」とあるが、小字名の由来にはなりにくい。二通りの解釈を挙げる。

①シロは「赤石山地で緩やかな傾斜地」(語源辞典)であろう。ダ(田)は「水田」または「場所」を示す接尾語である。以上から、シロダとは、「水田のある緩やかな傾斜地」、または「緩やかに傾斜している所」を意味するものと思われる。

②シロ(代)は「水田」を意味することが多い。シロダとは、「水田の多いところ」か。

全国地図には、シロダ地名は無いが、シロタ地名は1ヶ所あり、「後田」の字が宛てられている。

【降松】

フリマツ。

この小字はヤワタ小字の南東隣にあり、飯田女子短大の坂道を降りてきた国道151号線に突き当たった付近一带になっている。

フリマツとは何を意味するのであろうか。これも分かりにくい地名であるが、語源辞典によって二通りの解釈を挙げておきたい。

①フリ(降)・マツ(松)←フル(古)・マチ(町)と転じたもので、「以前からある古い人口密集地」か。鳩ヶ嶺八幡宮のあるヤワタ小字に近いところから、この解釈も可能と考えられる。

②フリはフル(震)またはフル(降)の連用形で、「ゆれ動いた地。落ちた地」をいう。マツは動詞マツハル(纏)から「巻いたような地形」を表す。合わせて、フリマツとは、「(短大側の)巻くような形の急傾斜地が崩れたと

ころ」を意味するか。八幡山の傾斜地を突くようにして、谷が伸びている。

全国地図には、フリマツ地名は1件の記載も無い。

【五反田】

ゴタンダ。

この小字はJR伊那八幡変電所の東方、県道八幡停車場線の南側の段丘麓にある。

ゴタンダとは、文字通り、「面積が五反歩もある大きな水田のある所」をいう。ゴタンダは伊那谷南部の各地にある小字名である。

ゴタンダには別の解釈も成り立つので挙げておきたい。

ゴタは「湿地」を意味する。ゴタンダとは、「自然湧水の多い場所」となる。ここのゴタンダは前者であろう。

全国地図には65ヶ所にゴタンダ地名がある。中・大字としては使われにくい地名と思われるが、瑞祥地名となっているのかもしれない。

【ヒエ田】

ヒエダ。『下伊那地名調査』には「七エ田」となっているが、江戸期の検地帳にもないので、写し間違いと思われる。

ヒエダはヒエダ（稗田）で、「稗を栽培する耕作地」（国語大辞典）をいう。水田に栽培する田稗は、水温が低く稲の生育のよくない水口などに栽培されたし、江戸時代には、肥過田の調整田として有効に利用されてきたという（民俗大辞典）。

ヒエダは「冷田」ではないか、と思っていたが、そうした解釈はないようだ。そうした所に田んぼを作るわけがない、ということかもしれない。

全国地図には、中・大字として、34ヶ所に記載されているが、ナナエダ

地名やシチエダ地名は載っていない。

【水佐代】

ミサシロ。

この小字はゴタンダ小字とクマノカワ小字の間にあり、県道八幡停車場線が通っており、飯田家畜市場がある。小さなミサシロ小字が東の方に飛び地になっているが、かつては繋がっていたのかもしれない。現在はほとんどが住宅地になっている。

ミサシロとは何か。先にシロダで、シロの解釈を二つ挙げたが、それにしたがって、ここでも二説を挙げる。

①ミサ（水佐）はミ（水）・サ（接尾語）で、「水のあるあたり」（語源辞典）を表す。サは「場所」を示す接尾語。ミサシロとは、「湧水のある緩やかな傾斜地」か。

②シロを「田んぼ」とすれば、ミサシロとは、「湧水のある水田のあるところ」となる。

全国地図にはミサシロ地名は載っていない。

【八幡・八幡下】

ヤワタ・ヤワタシタ。

鳩ヶ嶺八幡宮が鎮座するのがヤワタ小字で、その東側の傾斜地下方にあるのがヤワタシタ小字である。

ヤワタとは、「八幡宮を祭祀している場所」で、ヤワタシタとは、「ヤワタ小字の下の方にある土地」を意味する。

【ケガ沢】

ケガサワ。

この小字は2ヶ所にある。一つは毛賀沢に沿った広い小字で、もう一つは毛賀沢とは直接関係の無さそうな北の方にあつて、八幡山の麓を流れる九十九折井に沿う細長い小字である。

八幡山麓のケガサワ小字が、なぜこ

ここにあるのかははっきりはしないが、多分、ケガサワの発祥地ではないかと考えている。

ケガサワとは、何を意味するのか。ケガ（毛賀）はケガ（怪我）で動詞ケガル（汚。穢）の語幹で「傷がつく」意。あるいは、クエ（崩）・ガ（処）の約で「崩壊地形」を表す（以上は語源辞典）。いずれにしても「崩れ地」を意味するものと思われる。以上から、キガサワとは、「崩壊地のある谷川」とうことになろうか。

全国地図には、ケガサワ地名は記載が無い。

【上ケガ・下ケガ】

カミケガ・シモケガ。

いずれも、金色洞沢川と毛賀沢の間にある。

カミケガとは、「上流部すなわち標高の高いところにあつて崩壊地のあるところ」を、シモケガとは「下流部、すなわち標高がひくいところにあつて崩壊地のあるところ」を意味するものと思われる。

全国地図には、ケガ地名は2ヶ所にあるが、いずれも2500分の1「ときまた」に記載があるだけである。

【酒屋敷】

サカヤシキ。

この小字はケガサワ小字とミサヤマ小字にはさまれており、側稜の末端部の緩傾斜地にある。緩傾斜地の部分は、現在、果樹園と畑になっている。

サカヤシキとは何を意味しているのか。よく分からないが、仮説をあげなければならない。二説を。

①サカ（酒）はサカ（坂）で、「傾斜して勾配のあるところ」か。ヤ（屋）はヤツの一字音化で「小さい谷」をいう。シキ（敷）は動詞シク（敷）の連

用形の名詞化した語で「台地」を意味する（以上は語源辞典）。以上から、サカヤシキとは、「傾斜地のある小さな谷を伴った台地」か。

②サカヤシキとなれば「酒を製造したか販売をしていた屋敷」となるが、中世末から江戸時代の小字発生時に、そんな屋敷があったとも思われない。しかし傾斜地の上の松尾城社は直線距離にして200m弱と近いところにあるので、家臣団の居住地となっていた可能性はある。サカヤシキとは、「傾斜地にあった有力者の屋敷跡」とも考えられる。

全国地図にはサカヤシキ地名は載っていない。

【ミヤ原】

ミヤハラ。

この小字は、毛賀の諏訪神社周辺の緩傾斜地にある。

ミヤハラとは、「諏訪神社とその周辺の地」である。諏訪神社の神領も含まれているかもしれない。

全国地図には26ヶ所にミヤハラ地名が、中・大字として記載されている。

【ハリ原】

ハリハラ。

この小字は、島田と毛賀に2ヶ所ずつある。毛賀の場合は毛賀沢を南に越えた健和会病院の周辺がハリハラ小字になっている。ハリハラとは、「榛の木が生い茂った原」（広辞苑）であるが、榛の木とはハンノキのことで、カバノキ科の落葉喬木で、空中窒素を固定するので、開墾地や焼き畑で栽培されたという。

ハリハラとは、「榛の木が茂った原」または「開墾地」を意味するものと思われる。

全国地図には、ハリハラ地名は、4ヶ所が中・大字として挙げられている。

【浜井場】

ハマイバ。

この小字は、八幡山の段丘に1ヶ所、毛賀のミサヤマ小字の周りに3ヶ所ある。多くは急傾斜地にあるが、八幡山のハマイバのように、大部分は平坦地であるが急傾斜地に接している所もある。

ハマイバ小字は、この地方にも各地にある。下久堅のハマイバに従うと次のようになる。

①ハマ（浜）はハマ（岨）で、「崖」を意味する。イバ（井場）は「流水のある所」のこと。合わせて、ハマイバとは、「崖のある急傾斜地があって、水が流れている所」をいう。

②ハマイバとは、「正月の年占である破魔打が行われた所」か。破魔打とは、「二組が対抗して勝負で運勢を占う。一方が藁や樹枝などで丸く作った破魔矢の的をなげころばすと、相手が木の枝を投げてさえぎり、境界線を越えると勝つ」（国語大辞典）というもの。村境で行われることが多かったという。4カ所のハマイバのうち、最も村境に近いのは、毛賀にある一つで直線距離にして100mほど離れている。

【クツ形】

クツガタ。

この小字は、代田と毛賀の2ヶ所にある。

クツガタとは、地形か小字の形を沓に見立てたものと思われる。代田のクツガタ小字は、小字の形の一部がクツの形にみえるので、名付けられたものと考えてもよさそうだ。

毛賀のクツガタは毛賀沢が天竜川に合流するところにあり、地形をクツ

に見立てたのではないだろうか。毛賀沢左岸に突き出ている台地の形をクツの先をみることができる。

全国地図には、2ヶ所に中・大字として記載されている。

【八ヶ島】

ハチガシマ。

この小字は、飯田松川が天竜川に合流する、その右岸の堤外地にある。

ハチガシマとは、「鉢のような形をした島」か、「たくさん島があるところ」か、どちらかであろう。この小字名がつけられた時に、松川の河口には松川が運んだ土砂が島になっていた時期があったのではないだろうか。

全国地図には、ハチガシマ地名は記載がない。

【新井・新井島】

アライ・アライジマ。

アライ小字は、飯田松川が天竜川に合流する、その右岸の堤防内側にある。アライジマ小字は、天竜川堤防の内側にあつて、天竜グランドのある所にある。

アライ（新井）とは、「新しい川筋」のこと。まだ天竜川の堤防もできていなかった小字発生時に、この地域には、大雨の度に新しい川筋が頭れていたのであろう。

アライジマとは、「大雨で新しい川筋ができた時に、新しい島ができた場所」をいうのであろう。

全国地図には、アライジマ地名は無いが、アライ地名は、133ヶ所が中・大字として記載されている。

【砂余留】

スナヨトメ。

この小字は2ヶ所にあるが、いずれも天竜川堤防の内側の低地にある。

スナヨトメとは何をいつているの

か、よくわからない。寛永14年(1637)の検地帳にはスナタヨトメとある。

スナ(砂)は、「砂地」をいう。ヨトメ(余留)は、ヨト(淀)・メ(べの転で「辺」)で、「排水のわるい低湿地」(語源辞典)のこと。以上から、スナヨトメとは、「砂地で排水がよくない土地」を意味するか。

全国地図には、スナヨトメ地名は記載が無い。

【真瀬口】

マセグチ。

この小字は、県道八幡停車場線の南側にあり、イワシミズ・ナカジマ・スナヨトメ・ミョウガワラ等の小字に囲まれている。

マセとは、「放牧場の入り口の横木」(国語大辞典)であるという。マセグチは、「放牧場の入り口のあったところ」を意味するか。この付近、牧場をイメージすることは難しい。

どこにでもありそうな地名であるが、中・大字にはなりにくいのか、全国地図には6ヶ所と、意外に少ない。

【妙前】

ミョウゼン。

この小字には、5世紀に築造されたといわれている、古い円墳群のあるところ。飯田松川に沿うキタガワラ小字の南側にある。寛永14年(1637)の検地帳では、ミョウゼンバラ(みょうぜん原)となっている所であろう。

ミョウゼンとは何を意味するのか。難しい地名である。ミョウゼンという名の僧が住んでいた、ということではっきりするが、それは耳にしたことがないので、ありえないだろう。それでも、なんとか二通りの解釈を挙げておきたい。

①ミョウゼンとは、ミョウの名がつく地名がたくさんあったと思われるので、「ミョウ地域の前方にある土地」か。“前方”というのは飯田松川に近い方をいうか。

②ミョウ(明)はミョウ(冥)で、「目に見えない神仏の働きについていう」(広辞苑)。日葡辞書のミョウノカゴの例を挙げている。ミョウ(冥)の所在を円墳群とするのはどうであろうか。ミョウゼンとは、「神仏のおわす円墳群の前方」か。

全国地図には、ミョウゼン地名が3ヶ所にある。2ヶ所に「明善」、1ヶ所に「明前」が宛てられている。

【北河原】

キタガワラ。

この小字は、この地域の最北端にあり、飯田松川に沿って、上溝橋の上流部から天竜川河口まで続いている。

キタガワラとは、「北の方にある河原」をいう。東の方にある天竜川の河原を意識してつけられた地名であろう。

全国地図には、キタガワラ地名は中・大字として14ヶ所に挙げられている。

【岩清水】

イワシミズ。

この小字の中を県道新井・八幡停車場線が通っている。北側にはミョウゼン小字があり、南側はテラドコロ小字とマセグチ小字に接している。

イワ(岩)は「小石まじりの地」(語源辞典)をいうか。イワシミズとは、「自然湧水のある小石混じりの土地」を意味するものと思われる。

全国地図には、10ヶ所にイワシミズ地名があり、宛てられている字は、「岩清水」が9ヶ所、「磐清水」が1

ヶ所となっている。

【中島】

ナカジマ。

県道新井・八幡停車場線が、この小字を通過しており、天竜川に近く、西側にはマセグチ小字がある。

ナカジマとは何か。二説を挙げる。

①天竜川にまだ堤防が無い頃、この小字にも天竜川の一部が流れていて、ここに中州があったのではないだろうか。ナカジマとは「天竜川の中州であったところ」をいうか。

②自然湧水の多いところで、ナカジマとは、「流水に取り囲まれている土地」か。

全国地図に、中・大字として取り上げられているナカジマ地名は、262ヶ所に及ぶ。

【大石】

オオイシ。

この小字は、飯田松川の近くにあり、最北端のキタガワラ小字のすぐ南側にある。

オオイシとは、「大きな石があったところ」をいうか。岩盤の一部分が露出したのか、あるいは大満水の際に天竜川を流れてきたものなのか。もしかしたら土石流で夜泣き石のように飯田松川を流れてきたものか。はっきりはしない。

全国地図には、オオイシ地名が65ヶ所にある。中・大字として。

【町ヤシキ】

マチヤシキ。

国道151号線沿いにあり、JR飯田線と交差する地点の南側にある。

マチヤシキとは、「市街地で商店や屋敷が立ち並んでいるところ」をいうか。

全国地図には、マチヤシキ地名は、

9ヶ所と意外に少ない。

【久井】

ヒサイ。

ヒサイとは何を意味するか。解釈を二つ。

①ヒサ（久）は、「同じ状態が長く続くこと」（国語大辞典）。イ（井）は「自然の流水」のこと。ヒサイとは、「涸れない湧水のあるところ」となる。素直な解釈であろうか。

②ヒはヒ（泌）＝ヒツ（泌）のことで、「水がしみ出ること」をいう。サイはサイ（狭井）で、「小さな流れ」。以上から、ヒサイとは、「清水が湧き出ている細い流れのあるところ」か。

全国地図には、ヒサイ（久井）地名が1ヶ所だけ、中・大字として記載がある。

【上溝】

アゲミヅ。

この小字内には、竜門寺や天満宮があり、この小字は国道151号線の東側を中心にして広がる。

アゲ（上）は「高い方。山手の方」をいう。ミヅ（溝）は、前に触れたように「地を細長く掘って水を通ずる所」（広辞苑）である。

アゲミヅとは、「山手の方の井水のあるところ」か。ナカミヅ（中溝）小字と対照している。

アゲミヅ地名も、全国地図には1ヶ所しか挙げられていない。

【上ノ城】

ウエノジョウ。

この小字は上溝インターにあり、現在は墓地の多いところになっている。

ウエノジョウ（上ノ城）というからには、ジョウ（城）小字に対応していると思われる。とすると、城塞のあるジョウ（城）ではなくて、条里制のジ

ヨウ（条）であろう。しかし、このウエノジョウ小字に条里制の痕跡があるのだろうか。疑問を持たざるをえないが、他の解釈には心当たりはない。

ウエノジョウは、「山手側にある条里制の跡地」と考えざるを得ない。

全国地図には、ウエノジョウ地名は、中・大字として、3ヶ所挙げられている。

【柿木島】

カキノキシマ。

この小字は、飯田松川に沿う、大きな小字である。かつては飯田松川の氾濫原になっていたところであろう。

カキノキシマとは何か。二説を挙げる。

①カキノキシマとは、文字通り、「柿の木が生えていた島のあったところ」か。柿の木は上流から流れてきたのか、それとも岸の崖がくずれて島になったときに柿の木も一緒だったのか。

②「カキ（欠）・ノキ（除）と類義語を重ねた形で、崖などの崩壊地形」（語源辞典）をいう。カキノキシマとは、「崖が崩れて島になったところ」をいうか。

全国地図には、カキノキシマ地名は無い。

【宗久島】

ソウクジマ。

この小字は、飯田松川に沿っており、カキノキシマ小字とキタガワラ小字の間にある。

ソウクジマとは何を意味しているのだろうか。ソウク（宗九）の字からは固有名詞も考えるが、松川の中州に人が住めるとも思われぬ。そこで語源辞典によって四説を挙げる。

①ソウ（宗）はサハ（沢）の転じた語、ク（九）は動詞クユ（崩。潰）の語幹。

ソウクジマとは、「沢が潰れてできた島」か。飯田松川に流れ込む思井川は、現在はソウクジマ小字のすぐ下流にあるが、かつては思井川の河口はもう少し上流にあったことも十分に考えられる。

②ソウは動詞ソウ（沿）の連体形か。クはクガ（陸）の略。ソウクジマとは、「岸にそって長い島」であったかもしれない。

③これは可能性が少ないかもしれない。ソウはソウ（惣）で惣堂のことか。惣堂とは、中世に発生した農民自治組織が管理した、公の建物。クはク（処）で、「場所」を表す。ソウクジマとは、「惣堂のあった島」か。惣堂は村境や川の傍にあったという。

④これはもっと可能性は少ないかもしれない。ソウクはソウク（瘦軀）か。島を身体に見立てたもので、ソウクジマとは、「瘦せた細長い島」だったかもしれない。

全国地図にはソウクジマ地名は記載が無い。

【羽場・羽場下】

ハバ・ハバシタ。

これらの小字は、飯田松川の氾濫原とそのすぐ上の段丘にある。ハバ小字は上溝公園に、ハバシタ小字は飯田卸売団地にある。

ハバ（羽場）とは、濃尾地方伊東に多い崖地名で、「崖。傾斜地。土手の斜面。畦」を意味する（語源辞典）。

ここのハバは「緩傾斜地の周辺が崖になっている所」を意味すると思われる。松川の氾濫原とその一つ上の段丘との間は崖地になっている。

ハバシタとは、「ハバ小字の下方にある土地」をいう。松川の氾濫原になっているところである。ハバとハバシ

タの間には、思井川が流れている。

ハバは伊那谷南部の各地にある小字である。

【金棒】

カナボウ。

この小字は、ミョウゼン小字とアゲミゾ小字の間にあり、東側にあるミョウゼン小字より少し高い緩傾斜地になっている。

カナボウとは何を意味するのか。この地名も難しい。ボウ（坊）は条里制に関わる地名というが、この傾斜地では難しいと思い、取り上げないことにした。以下、語源辞典によって、解釈を三つ。

① カナ（金）＝カネ（鐘）で、「釣鐘」のことか。ボウ（棒）はボウ（坊）で「堂宇」をいう。以上から、カナボウとは、「釣鐘堂のあったところ」となるが、果たしてあったのかどうかはわからない。

② カナはカク（掻）・ナグ（薙）と同じで、「掻き薙がれたような土地」をいう。ボウは動詞バウ（奪）の連用形バビの転じた語で、「傾斜地」をいう。カナボウとは、「崩壊地のある傾斜地」をいうか。

③ カナはカノと同じように「焼畑」を意味する。ボウは傾斜地。カナボウとは、「焼畑が行われていた傾斜地」と解することもできる。

全国地図にもカナボウ地名が、2ヶ所に中・大字として記載があり、いずれも「金棒」の文字が宛てられている。

【七通り】

ナナトオリ。

この小字は、ヒエダ小字とアゲミゾ小字の間にある。

ナナトオリとは、「通路の多いところ」か。ナナ（七）は数をいうよりも

めでたい数字なので、単に「数が多い」ことを表現しているものと思われる。現在も短冊形に区画された畑や水田になっており、その境に通路やあぜ道があったのであろう。

全国地図には、ナナトオリ地名は記載が無い。

【欠下】

カケシタ。

この小字は2ヶ所にあり、一つはミョウガワラ（明河原）小字の上、西側にあり、イシハラ・クマノカワ小字の下側、東側になる。もう一つは、天竜川の川っぶちにあり、アライジマ小字とミョウガワラ小字に挟まれている。

カケシタとは、字面の通りで「崖の下」を意味する。ガケ（崖）は日葡辞書でもカケとなっている。語源を「欠」とする辞書と「懸」とする辞書があるが、いずれも意味は同じである。

全国地図には、カケシタ地名が、中・大字として、2ヶ所に挙げられている。

【明河原】

ミョウガワラ。

この小字は、ミョウ小字の東側になり天竜川端にまで広がっている。

ミョウガワラとは、「ミョウ小字に近い河原」であろう。きれいに整地されていて、一辺がほぼ一町で条里制を思わせるが、新しい区画であろう。

全国地図には、ミョウガワラ地名は、1ヶ所にだけ記載がある。「茗ヶ原」の字が宛てられているが。

【中川】

ナカガワ。

この小字は、3ヶ所にあるが、中を流れる小川は、いずれも、最も下流にある祝井沢川の天竜川河口付近に集まっている。

ナカガワとは、「三つのうち中央にある川」（語源辞典）であろう。北には飯田松川があり、南には毛賀沢川がある。いずれも天竜川の大きな支流で、二つの大きな支流の間であって、天竜川に河口を開いているのは祝井沢川であり、この祝井沢川が中川に相当するものと思われる。

全国地図には、ナカガワ地名が中・大字として、144ヶ所も記載されている。地名になりやすい名前なのかもしれない。

【ソリ田】

ソリダ。

この小字の中に、NHK 飯田ラジオ中継放送所がある。

ソリダとは何を意味するのか、よく分からない地名の一つ。仮説を二つ。
① ソリは、島根県では「何枚かの田が階段状をなしているうちの一番上と下の中間の田」をいう（語源辞典）。飯田とは離れた土地の方言であるが、これを活かしたい。ダ（田）はダ（処）で「場所」を表す接尾語であろう。ソリダとは、「段丘が階段状になっているところで高さが中頃の段丘」のことを意味するか。

② ソリとは「休耕中の焼畑地。そらし畑」（広辞苑）だという。とすれば、ソリダとは、「焼畑耕作が行われていた場所」ということになる。しかし、ここで、果たして焼畑が行われていたかどうか、という疑問は残る。

全国地図には、中・大字として、ソリダ地名は7ヶ所、ソリタ地名は4ヶ所にある。

【桧ヶ坪】

ヒノキガツボ。

この小字は、ソリダ小字の北側のやや高いところにある。現在は松尾東保

育園があり、県道新井・伊那八幡停車場線が通っている。

ヒノキガツボとは何を意味しているのか、これもよく分からない地名である。解釈を二通り。

① ヒノキの苗を育てていたところであろうか。ツボは「一般に縦横が同じ長さのもの」（語源辞典）をいう。ヒノキガツボとは、「ヒノキの育苗地で縦横の長さがほぼ等しい土地」か。
② ヒノキとは、ヒ（樋＝水路）・ノ（助詞）・キハ（際）の略で、「水路のほとり」をいう（語源辞典）。ヒノキガツボとは、「水路が縦横に走る、縦横がほぼ同じ長さの土地」であろうか。

全国地図には、ヒノキガツボ地名の記載は無い。

【寺所】

テラドコ。

この小字は、ミョウガワラ（明河原）小字の上の段丘にある。

テラドコとは何か。語源辞典によりながら、仮説を二つ挙げたい。

① トコ（所）はトコ（床）で、「高くなって平らな区域」をいう。テラトコとは、「寺院があった高くて平らな所」をいうか。

② テラ（寺）←タヒラ（平）と転じたもので、「緩傾斜地」を意味する。テラドコとは、「ゆるやかに傾斜している、高くなっているところ」を意味する。

全国地図には、3ヶ所にテラドコ地名が、中・大字として挙げられている。宛てられている字は、「寺所」が2ヶ所、「寺床」が1ヶ所。